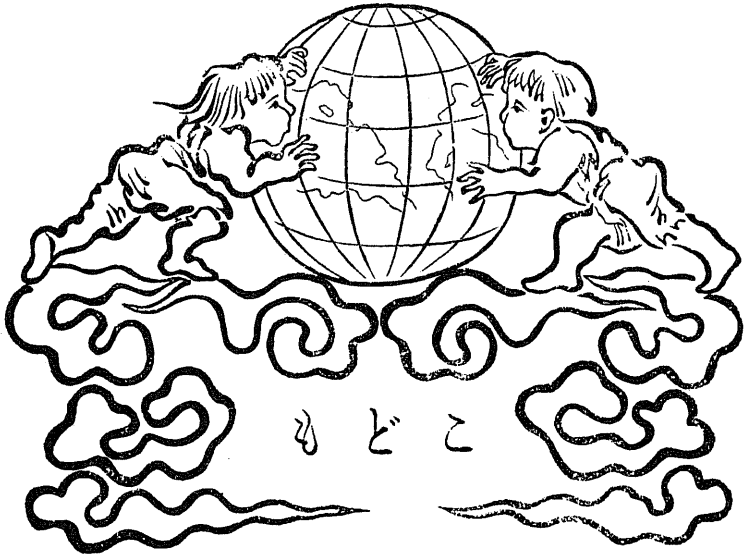


も ど 子 と 人 婦
號 九 第 卷 參 第



風かぜの神かみ

やまとの翁

むかしくまづある處ところに
二人ふたりの兄弟きょうだいがありましたと
さ。兄にいさんの方は、お金持かねもち
でした。弟せいでいの方は大變たいへんな
貧乏びんぱんなんです。
ある時ときのこと、あつい夏なつも
やっと過すぎさりまして
そろく涼すずしい秋あきの時とき候ころに

なりましたから、この貧乏な弟は、畑のものを刈り入れる積りで、おかみさんや、子どもらを家に残して、一人で、野らに行きました。さて、だん／＼刈り取って、やがて、家に歸らうとした所が、忽ち、大風が吹いてきて、折角刈り取った米を、みんな吹き飛ばされてしまひましたので、さう、怒るまいことか、團右衛(これは弟の名は、眞赤になって、

『こりや、いけないぞ、よし／＼今から行って、あの風めを尋ねだして、一つ談判してやらう。人が折角骨折って、あれ程集めたものを、吹き飛ばしてしまふとは、なんのこった』。

夫から、すぐ家へ歸って、支度をして居ると、おかみさんは

『あなた、どこへおいでになります?』

「今から、風の神を探しに行くのだ」といって、其譯を話しますと、

「風の神をですって!?! 探せるもんですか、そんな馬鹿なこと
は、おやめなさいな」

「いや、行くのだ、行って、何んでも尋ね出して、談判して
来んければならぬのだ」

と、いって、團右衛門は、妻や子供に別れて、どこを目的ともなく
家を出て行きました。

さて、だんく山を越え、川を渡って行きました所が、とど
し、大きな森の中に這入り込みました、見ると、其中に、大き
な小屋があるので、まづ、この小屋で、一息休ませて貰はうと

思つて、戸を明けて這入った所が、さう驚いた、その小屋の中
 には、夫はく大きなく年とった大坊主が、家中一杯に擴が
 って居るのです。何者でしよ、この大坊主は？ 他でもない
 全く風の神なんです。團右衛は、一目見て吃驚しましたが、仕
 方がないから、態とおちついて、

『や、叔父さん、今日は！』といて、挨拶しますと、風の
 神は思つたよりも叮嚀に

『や、お前さん、何しに來ました？』

『は、實は、私は風を探しに歩いてるので、見付ければよ
 し見つからなければ、どこまでも行って見つけてくるつもりで
 す』すると、風の神は、大きな膝を、ずっと前へつき出して

「フーン、ではお前さん、何かい、風の神に何か用でもおありなのかい、夫とも風の神が、お前さんに、何か悪い事でもしたのかい」

「したともさ、まー聞いて下さいませ、こういう譯なのさ、昨日私は、妻や子供を家に残して、田へ行ったのでしよー、夫から僅ばかりの米を刈って、やれ嬉しやと思うて居る中に、意地の悪い大風が、吹いて来て、一粒も残さずに吹き飛ばして行ったじゃありませんか、もとく私も貧乏で、田といへばあれっばかしの小さなのしかないのだもの、一日汗水くになって、やっ」と刈り取ったものを、何の咎もないに、たった一息に吹き飛ばされて堪ったもんでない。だから、私しや、家の者にいって、

何でも、風の神を探し出して、之からは、決して貧乏人のものを吹き荒らす様な、不人情な事をしてはいかないって談判して来ようって、夫で、まゝ、出かけて来たのです」

この話をきいて、風の神は、ポーンと大きな手を拍って

『あっそーかい、なるほど、これからは氣をつけて貧乏人のものはなるべく、吹き飛ばさない事にしましょう。然し、團右衛さん、もゝ、風を尋ねに行くには及ばぬよ、實は、私が風の神なんだ』

『夫じゃ』と 團右衛は 風の神と聞いて、俄かに力づいて、

『お前さんが、あの 風の神かい!? 夫じゃ あの吹き飛ばし

たお米をただ今戻してくれるかい』



「ハ、ハ、ハ、そりや出來ないさ、お前さんだつて、一旦死んだ者を墓から、呼び戻す譯にや行くまい、だからさ、私もお前さんに損害を與へた丈のものを、他のもので返す事にして、此袋を上げることにしよう。で、いつでも、食物が欲しくなったら「袋よ袋よ、御馳走を出してくれ」といふと、すぐ何でも出てくるから、之で妻や子供は十分養ふことが出来るよ」といって、柱にかゝつて居つた、綺麗な包み袋をくれました。團右衛門は、それを聞いて、非常に喜んで、

「イヤハヤ、働く事もしないで、食って行ける袋とは、有りがたいことですな、これは どうも辱けない」

「然し怠惰者は、すぐと失ふかも知れぬよ、さー、之を持って

早くお歸り、けども、お前途で、必らず酒屋に寄っては行けな
 いよ、若し寄る様な事があると、いくら隠しても、私は知って
 居るよ』

『や畏まりました、決して、お言付は背きません』

夫から團右衛は、袋を貰って、風に違乞して、風の家を出て、
 歸りかけました。暫く行くと、途中に一軒の酒屋がある。其前
 まで来てから、團右衛は、風の神が言った事が、眞實か如何か
 を試して見たくて仕様がなない。『一番、酒屋へ這入って、この袋
 を試して見ようかな、酒屋に這入んなどいったけども、な一に
 這入って見よう、知ってるなんて、風は見て居ないもの、知る
 筈があるもんか、えー這入れく』

そこで、とう／＼酒屋の入口に向って行って、例の袋は入口の柱に引っかけて、ずーっと這入って行くと、店の者が

『やゝ入らっしゃい、』といったが、ひょいと、顔を見ると、知つて居る貧乏人の團右衛門であります、團右衛門は元來、いゝ人なんです、一つ悪い事には、生れ付いて、少々お酒が好きなので、この酒屋にも、少し酒代のお借りがあるらしいのです。店の者は、誰かと思つたら、團右衛門でしたから、又貸しになると思つて始めと違つて、餘り善い顔はしません、團右衛門も、夫と知りましたが、態と

『オイ、何か御馳走が出来てるかね』

と聞きますと、

『お相憎さま、さし上げる様なものは、何もありませんで』
といふ。そこで、團右衛は、「こいつ、一番試しに驚かしてやれ」と思ひましたから、『ハ、ハ、ハ、夫では、他から取り寄せようかな』といひながら、いきなり振り向いて、袋に向つて、『袋よく御馳走を出してくれ』と叫びますと、驚くべし、忽ちの中に、種々な御馳走が一杯に食卓の上に並びました。
さし、之には、店の者らは、皆吃驚仰天しました。それで、吾も吾もとよつて、たかつて来て、『これは、不思議だ、どうも奇妙だ』といつて、いろく其譯を尋ねます
そこで團右衛は、急に天狗になつて、『まゝ、そんなに噪ぐに及ばんから、皆來て、これを食べればよいではないか』といふの

で、皆出て来て、丸くなつて、御馳走を食べたり、お酒を飲ん
 だりして居ます。處が、一體此者共は、不良漢ですから、どう
 かして、この團右衛を酒に酔はして、其暇に、あの袋をすり代
 へてやらうと思ひましたから、いろく甘い事をいって、團右
 衛にお酒を勧めます。好きなお酒だから、團右衛は、勧められ
 るまゝに、ついく飲み過して、とうくそこへ酔ひ倒れて、
 眠つて仕舞ひました。すると、皆がそーっと、其袋を取りはづ
 して代りによく似た他の袋を持って来て、其處へ置いて行つて、
 さて、夜明になりますと、皆が又寄つて来て、起したから、團
 右衛は、吃驚して目を醒まし、狼狽て込んで、すり代へられた
 袋を腰につけて、家へ歸りました（つゞく）